

# 出雲神話 活用策探る 松江でフォーラム

出雲神話が根付く地域文化を見つめ観光資源として活用を探るフォーラムが11日、松江市内であった。発表者の大学生が、スサノオノミコトの妻クシナダヒメ



クシナダヒメの新たな魅力を披露する島根大と県立大の学生—松江市殿町、県民会館

の「強さ」に着目した地域振興策を披露し、専門家の講演もあった。

出雲神話について研究する島根大と県立大の学生5人は、ヤマタノオロチやス

サノオの名前を冠した商品やスポーツチームがある中で「土着の神であるクシナダヒメに関連する物が少ない」と指摘した。

スサノオに求婚されるほどの魅力に加え、くしに変身してスサノオとともに戦いに出た記述や、彫刻家荒川亀斎(1827〜1906年)の作品「稲田姫像」で剣を携えている様子から

「自ら戦う女性としての新しい側面が受け取れる。守られるだけのイメージを払拭し、新たな魅力を見いだせるのではないか」と提案した。

国学院大の平藤喜久子教授(神話学)は講演で、ヤマタノオロチ神話の舞台となった奥出雲町や斐伊川について「歴史と神話が重なり合う土地で、現代でも人間が自然とどのように付き合い合っているかを教えてくれる」と話した。筑波大の中弘名誉教授(宗教学)も「宗教文化が生活に深く浸透し、観光資源として活用

するには地域の人々に大切さを認識してもらう必要がある」と述べた。

聴講した県立大人間文化学部3年の小原紀保さん(21)は「私が知っている神話の斜め上をいく話が聞けた。とても面白かった」と語った。

フォーラムは地域の文化や歴史を海外に発信するため2018年に結成した、島根国際交流委員会が企画。昨年に続き2回目の開催で、約80人が参加した。

(高見維吹)

## 識者が読み解くマスク緩和

新型コロナウイルス禍の3年間で当たり前になったマスク着用の考え方を見直した国の判断を、識者

はどう評価するのか。島根県内で活動する3人が小児保健、公衆衛生、社会心理の視点でそれぞれに読み解いた。

(聞き手は報道部・勝部浩文)

島根県立大人間文化学部

前林 英貴准教授(小児保健学)



子どものマスク着用を続けることはデメリットの方が大きいと考える。表情が

# 着用継続 子に悪影響

子どものマスク着用を続けることはデメリットの方が大きいと考える。表情が隠れるマスクは子どもにとって、特に喜びや笑いの感情が伝わりにくくなるとされる。感染予防の効果がある半面、感情を認識するための情報が減り、感情が乏しくなる可能性がある。

また、口の表情が読めないことは言語発達に影響が出る恐れもある。教員や保育士など専門職の人も、なるべく外した方が長い目で見れば子どもにとって良い結果になるのではないかと物心ついた時から

マスクした子どもに、今後何らかの影響が出るかは継続して追う必要がある。子どものマスク着用は本人の意思ではなく、周囲の大人によって決まる。マスクに予防効果はあるが、重要なのはマスクだけでなく総合的な感染予防の対策を講じることだ。

## 車椅子で学生生活満喫

### 県立大・藤村さん 卒業生代表で謝辞

病で幼い頃から車椅子生活を送ってきた藤村光さん(22)が16日、県立大人間文化学部(松江市浜乃木7丁目)の卒業を迎えた。難病を患いながらも神社について学ぶサークルを立ち上げたり、海外研修に参加したりと学生生活を満喫。卒業生代表で謝辞を述べ、学友や教員に感謝を伝えた。藤村さんは脊髄性筋萎縮症を患い、車椅子で過ごしている。謝辞では入学時、



卒業式後、学友や教員と記念写真に納まる藤村光さん(左手前) 〓松江市浜乃木7丁目

障害があることに「引け目を感じていた」と振り返りつつ、サークルの代表となりカフェを企画したことなどに触れ「自分のしたいことに挑戦してみると、自然と輪が広がり、一人ではな」と思えた」とした。

4年間、教員や学友と対話を重ね「自分を知ることができた」と述べ、教員や学友に対し「感謝しかない。4年間を誇りに思い、社会に貢献できるよう精進する」と力強く話した。

卒業式後には学友らと笑顔で記念撮影。藤村さんは松江市内のデザイン会社に勤務する予定で、「今まで多くの人々が支えてくださった。デザインで松江に恩返ししたい」と見据える。

ゼミの担当だった増原善之教授(59)は「自分自身に正面から向き合った4年間だったと思う。卒業後も何事にも正面から取り組んでほしい」と願った。

(古瀬弘治)